

九鬼山

毎日新聞旅行

25日



大月の近くにある九鬼山に行ってきた。リニア新幹線の試験線がすぐ下を走っている。本年の忘年山行である。2027年の本格開通のころには生きていないから、試験走行にでも応募しようかな、などと言いながら歩く。この山はわずか970mであるので、行くまでどこにあるのかさえ知らなかった。典型的な里山というやつであ



ろう。しかし里山というやつは丘みたいなものかというとなんかそうじゃない。稜線に対して山道は真っ直ぐにつけられている。ジグザグ道とか巻道にするというようなアイデア

はない。ひたすら真っ直ぐに道を付ける。だから急な角度でも真っ直ぐ登ったり降ったりすることが多くケッコウこたえる。しかし長続きはしない。これが里山の里山たるところである。指導票の整い方も今一つであることが普通である。しかしアメリカの山のそっけなさほど悪くはないが。去年は別のツアーリーダーがここで道を間違えて 1 時間ほどのロスをしたと今回リーダーの花岡さんが言っていた。言葉の裏には俺はそんなドジはしないよと言いたげであった。確かに花岡さんの案内にはきめ細かさがある。1/25000 の地図とコンパスを組み合わせた読図方法をポイントごとに教えてくれる。“ここは 100 度の方向を目指して進む”などと指導しながら歩く。客に対して、自分と同じレベルになって山を楽しめ、と言う。まあ大半の人は、そういった面倒くさいことはツアーリーダーに任せられるから参加しているんだよと思っているが、中には真面目に質問しているジイサマやバアサマがいる。こんな里山を好む人にはマニアックな人もいるようだ。バスで私の隣に座った人もそのような人らしく、開いた 1/25000 の地図はかつて歩いたルートが赤鉛筆で染まっていた。年間で 20 数回はこのような山歩きをしているという。最初は感心して聞いていたが、このような山登りのやり方が山登りのすべてであるような言い方をするので、帰りのバスの後半は寝たふりをして遠ざけた。今年になって 4 回目くらいになると思うが、前回の四国に続いてまた M カワさんに会った。考えることが似ているのかもしれない。

